



Title	“かゆみ” とむし
Author(s)	吉田, 政弘
Citation	makoto. 1982, 39-40, p. 4-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

かゆみとむし

大阪府立公衆衛生研究所

主任研究員 吉田 政弘

ヒトにかゆみを与える原因には、多くのものが考えられます。子供達に新品の衣服を着せた時にどうかするとその繊維でかぶれたりする場合があります。事務所などで冷暖房の吹き出し口から何かのはずみで断熱材に使われているグラスファイバー等によるいわゆる物理的（生物以外の）な刺激によりかゆみを覚える例もよくあります。ここで私が触れてみようと思いますのは、生き物による被害についてとり上げてみようと思います。

まず最初に、天井裏をさがす「ネズミ」達について。鼠類の体表上には多くの節足動物が付着、寄生しています。（表1参照）

これらのうち、イエダニやノミ類が人に吸血することによりかゆみを覚えさせます。どちらに

も共通なのは、ネズミが生きている間は、ネズミの血液を吸っているのですが、何かの原因で死んだり、いなくなってしまうと、残されたダニや昆虫類は、ネズミ以外の吸血源を求めてさまようわけですが、たまたまその近くにいる他の哺乳類とくに人に対して攻撃をしかけるのです。ネズミの巣（とくにクマネズミ）の中のダニ（イエダニ）数を推定しますと五〜六万匹もいることがわかりました。このイエダニによる被害の例でこんな話があります。ある大阪市内の麻雀屋さんでなにか白いパイの上に、赤ゴマをふったように天井から落ちて来、楽しくあそんでいたサラリーマン諸氏が気持ちわるがるのもつかの間、かゆくとかゆくたまたまなく、そそくさとジャンをたたんで帰っ

てしまつてゆっくり遊んでいられたかったとのこと。ネズミに關してのもう一方の旗頭のノミは、ダニ類と違って昆虫の仲間ですが、翅が退化しているため、ビョンビョンはねて移動する。あのノミのサーカスにでてくる仲間です。ノミ類は、雌雄共に寄主から吸血する昆虫類です。吸血をすませた雌ノミは、ネズミの巣の中で産卵したり、ゴミのあるところで産卵します。ネズミのフケやかきむしりにより生じた血餅等や排泄物のゴミの中で幼虫が育っていきます。

面白い事にノミ類は、その宿主をきっちりきめてはいる律義な昆虫類です。ネズミには、ネズミノミの仲間、ヒトにはヒトノミ、ネコにはネコノミ、イヌにはイヌノミといった具合に。これらが本来の宿主から離れた時に、

ヒトに被害を与えます。近年、特に戦後の日本では、大そうじの後の殺虫剤の散布や、衛生環境の大幅な改善により、それらのノミによる被害は、殆んど見受けられなくなっていました。（とくにヒトノミについては）

ところが現在でも依然として生じる被害はネズミに關するノミ類や、ネコ、イヌに係わるノミ類によってしばしば起つています。つい最近でも、大阪府下のベストコントロールの事業にたずさわっておられる方々の間や、大阪府下の保健所の方々の間で、ノミによる被害、特にネコノミによる被害の聲が多い事が言われております。この被害は、野良犬やネコ達が床下や空地でノミを増殖させている元凶だと言えます。社会の世情をよく反映しているものだと思ひさせられます。次に、最近新聞やテレビ等でよく報道されているシラミ類についてですが、私共が小学生の頃DDTを頭や背すじにまっ白くなるぐらいにふりかけたことがあります。それも小学校四年生位（昭和二八年）迄であつたと思います。それ以降最近に

致るまでその様な事はないのですが、小学生の間で集団的な発生の報道を聞くたびに首をかしげる次第です。昨年も全国各地でアタマジラミによる寄生は二万名にも及んだと報告されています。また、ツツガムシ病の復活が問題にもなっています。野山にハイキングや登山したりするときによく経験するのですが、ガサ原をかき分けて進んだ時や、一服ついて腰を下ろしたりした時に、ツツガムシやマダニ類にたかられる時があります。

ツツガムシ類には、リケツチア疾患を伝播するダニの仲間でもあるわけですが、草の葉のうらや土の中で吸着に程よい動物が来るのをまちかまえているのです。本来は野山に生息する野鼠類（アカネズミやスミスネズミ等）に吸着する事が多いのですが、たまたま人間がそういった所に入りこむことにより、ネズミにかわつて吸着されるわけですが。吸着されたツツガムシにリケツチアが保有されていると人は熱性の特有の疾患にかかる危険性が增大するわけであり、ツツガムシ病は、すでに過去の

表 1 ネズミの外部寄生虫—ドブネズミとクマネズミの比較
(地点大阪府)

年	地 点	調査 鼠数	ヒメト ゲダニ	イエダニ	ネズミト ゲダニ	ヨロー ネズミ	ロッパ ネズミ	メクラ ネズミ	イシ ネズミ
1974	岸和田	3	0	2	9	0	0	0	
	高根	2	0	0	0	7	0	0	
	布施	1	0	0	0	6	0	0	
	吹田	5	2	0	0	0	0	0	
	枚方	6	0	0	0	5	0	0	
1975	富田林	1	0	0	0	0	0	0	1
	門真	5	0	0	1	2	0	0	0
	八尾	4	0	0	0	0	0	0	3
	藤井	1	0	0	0	0	0	0	0
	貝塚	1	0	0	0	0	0	0	0
1976	門真	2	1	0	0	3	0	0	0
	吹田	9	6	1	0	0	0	0	0
	守口	1	0	0	0	1	0	0	0
1977	泉大津	1	1	0	0	0	0	0	0
	門真	2	0	0	0	0	0	0	0
合 計		44	10	3	10	24	0	4	
組成(%)			45.1			54.9			
			19.6	5.9	19.6	47.1	0	7.8	

クマネズミの外部寄生虫

年	地 点	調査 鼠数	ヒメト ゲダニ	イエダニ	ネズミト ゲダニ	フジツ ガムシ	ヨロー ネズミ	ロッパ ネズミ	メクラ ネズミ	イシ ネズミ
1974	岸和田	12	0	11	1	0	31	0	0	
	布施	5	0	0	0	0	0	0	6	
	枚方	3	0	0	0	0	0	0	0	
	富田林	1	0	0	0	0	0	0	0	
1975	池田	8	0	0	0	0	1	0	0	
	八尾	1	0	0	0	0	0	0	0	
	藤井寺	4	0	2	0	0	0	0	1	
1976	門真	12	6	18	0	0	39	0	6	
	高根	5	0	28	0	0	4	23	1	
1977	寝屋川	16	1	2	0	10	1	1	1	
	富田林	1	0	0	0	0	18	0	0	
合 計		68	7	61	1	10	94	24	15	
組成(%)			37.3			62.7				
			3.3	28.8	0.4	4.7	44.3	11.3	7.1	

病気と思われており近年患者も漸減してきていたのですが、最近では、またぞろ各地に多くの患者発生を見るようになり、再び流行の様相を呈しています。野山に入る時や河川敷での魚つりの際には、くれぐれも気をつけたいものです。マダニ類もツツガムシ類と同様に野山に生息しているものですが、ツツガムシ類よりも大きく、吸血時にはもとの何倍もの大きさになります。あたかも「ゴブ」のように

ぶら下がるわけです。よく獐犬の足またなどに付着しているあのダニ類であります。このダニ類は吸血時に、寄主の筋肉にしっかりとくこみくちばしを血管にさしこむために、むりやりに引っばって取り除こうとしますと、くちばしが筋肉中にのこったり、筋肉がはぐれてゴボツと穴があいたようになります。その傷がもとで、バクテリア類による二次感染を引きおこしたりします。最近では、自然のい

く分残された、山地をひかえる所に開発された住宅の庭先でのこれらのマダニによる被害が散見される様になってきています。以上は、本来ネズミ類に寄生しているダニ類や昆虫類を中心にして「かゆみ」を与える生物についてみてきました。その他にまだまだたくさん生物が考えられます。これからは、人の家を中心としてみていきます。本年ももう暑い夏が終りかけ、朝晩は涼しく、庭のすすきも、赤

い穂にそめ、田んぼも黄金色の稲穂をたれるようになってきていますが、過ぎ去った暑い夏の頃を振りかえってみましょう。夏の「かゆみ」の主役はなんといっても蚊類達です。蚊類はハチやトンボ達の四枚ばねとは違って、二枚の翅を持った、双翅目といわれる仲間です。それらのうちの大部分の雌蚊は、人や動物にたかり吸血して産卵し、これらの蚊類達も本来は、人以

外の動物から吸血しているのですが、その生活圏に入りこんだ人間達にも、その吸血源を求めてくるわけでありす。とくにコガタアカイエカという蚊は、水田から主として発生する種類ですが、本来は、牛や豚、馬などの大型の哺乳動物から夜間吸血するのですが、それらの吸血源にめぐりあわなかった雌蚊は、近くにいるヒトにたかつかます。水田を多くかかえる日本を初めとするアジア地域では、日本脳炎ウィルスを伝搬し、そのため患者発生を見るわけです。この他に、お墓参り等の際にかうけのそうじや献花しているあいだに、待っていましたとばかりに、そこいらの草むらなどにひそんでいた小さいまっ黒な蚊—ヒトスジシマカに首すじや、足まわりのところに、まっ黒になる程にたかつかき、おっ払ってもなんどもアタックしてくるいやな蚊に悩まされるものです。この蚊は、コガタアカイエカと違って、せまい水域：例えば、空缶、古タイヤ、切り竹やあかうけなどで、ほんのちよとした小水域が増えます。犬小屋やニワトリ小屋などでは、コガタアカイエカとよく似たアカイエカがわんさと吸血に襲来し動物

達もバタつきます。あぐくのはてには、犬糸状虫を伝搬し、これによる犬の感染率は高いと云われ、そのために犬の死亡率も高い様です。これらのちっばけな蚊達も、かゆみ以外にも、多くの疾病を人や動物に伝搬するためいかな仲間達ではありません。これらの蚊は、いずれも人の建物の外の水域で幼虫が発生するのですが、建物内にも水のあるところでも蚊達は発生しており、人が悩まされています。それは、多くはビルの地下室などにある遊水ビッドや浄化槽のような汚水域で、アカイエカとそっくりの蚊が発生します。この蚊はチカイエカと違って外見上は、アカイエカと区別がつけないのですが、生態上は非常に違っており、アカイエカの雌蚊は一回目の産卵から動物の血液を必要としますが、チカイエカは一回目の産卵は幼虫時代に摂取した栄養でまかなわれるため、吸血を必要としませんが、二回目の産卵からは温血動物からの吸血が必要となるわけであり、その吸血源を求めて、ビルの中では、色々な空間から（排水管、送風ダクト等）ビルの内に侵入してくるので、内にいる人達が咬まれて、かゆみの

原因を作り出しています。最近のビル管理の重要なポイントの一つとして水のあるところの生物相にも目を向けていきたいものです。このチカイエカと同時に発生している生物は他にもあります。それには、チョウバエ類であったり、ゴキブリ類の太繁殖源であったりするわけですが、あの人間の汚物の中で堂々と生存する生き物達。それゆえにそれらの発生源から這い、とび出したゴキブリ、蚊、チョウバエ類などの昆虫達の持っている細菌の多いさは想像を絶する程で、なんと不衛生さきまりないことか！一度、ビルの遊水ビッドや浄化槽のフタをあけてみませんか？！今までに登場させてきた蚊類達は、まだそのすがたを肉眼で認められ、比較的発見がたやすいのですが、これらよりもまだまだ小さい生き物が、人にもるさをしていきます。皆さんも御存知だと思いますが、毎年真夏のね苦しい時が到来しますと、あちこちの住宅で集団的に痛みを伴った「かゆみ」を訴えられることが多くなっています。この虫は、アリガタバチの仲間、他の昆虫類の寄生蜂であり、この仲間による被害には、クロアリガタバチとシバンムシ

アリガタバチの二種類が考えられます。前者のクロアリガタバチは、主としてヒメスガキミキリムシの幼虫に寄生しています。ヒメスガキミキリムシは杉の皮の形成層を幼虫のえさとし、成育します。このことは、被害の訴えられた家屋の天井裏を探索すれば歴然とするでしょう。あるPCOの方の御好意でその現場を観察させて頂いたところ、そのお宅の屋根がわらの下に張ってある野地板（パラ板か？）に多くの生の杉皮が残っており、その皮の所々に穴があき、そこから細い木屑が、天井裏板上にアリ塚のように積もっているのです。懐中電灯で照らして何かおられないか目を凝らすと、そこら中にヒメスガキミキリの成虫が累々と転がり、クロアリガタバチもそこいら一面にはまわっているのです。発生源は天井裏の杉皮のついた木材にあったのです。後者のシバンムシアリガタバチは、一九七〇年代になって名古屋市の報告をきっかけとして、それより少し遅れて大阪府下でも大規模にその被害の発生を見るようになってきました。もう最近では珍らしくはない程です。今年も例年に違わず暑い夏に集中して発生してい

るのです。このアリガタバチは、クロアリガタバチの発生期が春や秋に見られるのとは少し違っています。これは、寄主であるシバンムシが主として乾燥した植物性のもの、家庭内においてはめてみますと、乾燥食料品（そうめん、干しうどん、フ等）や稲ワラを主材としたよく乾燥したタタミなどの中でよくふえ、その幼虫に寄生します。これらのアリガタバチによる被害は、痛みを伴ったかゆみを呈します。これは、アリガタバチの棘針の挿入による痛みであり、同時に起る毒液の注入によるアレルギー反応としてかゆみが生じてくるわけであり、これらの寄生蜂による被害は、蚊と同様に雌によるもので雄はそのような被害を人には与えないのです。これらのハチ類に及んでも比較的肉眼で認められやすいのですが、まだまだ小さい生物の被害による場合は、人によっては原因不明の……という事になりかねないのです。そのような生物にはどんなものがあるのでしょうか。大きさが大抵の場合0.2~0.3mm程度のホコリ程の細かい肉眼的にみとめられがたいダニ類が悪さをしているのです。これらは主に家屋内のゴミの中から見

い出されます。家の中のゴミ、日常そうじによって除かれるゴミ（主にそうじ機を使って）の中の生物相を覗いてみましょう。ゴミはゴミと簡単にたたづけてしまえるでしょうか。ワイルドマンフラスコ・ガソリン法で極くわずかのゴミを検査にかけてみますと、口紙上に展開されたゴミ類にまじって多くのダニ類……乳白色やあめ色にかがやいて見い出されます。私共は、府下の保健所から寄せられる「かゆみ」の原因を生物の視点から分析するため、被害を訴える住民の家庭から採取されたゴミの中にどのような生物が存在するか検査し、その結果より「かゆみ」の原因になるであろう生物を分析しています。これらの原因のうちでトップに上げられるのは、ツメダニ類であろうと考えられます。表2にあげてあります様に肉眼的には原因の分らないとした多くのサンプルの中からこのツメダニ類が共通して発見されていることがわかります。他にも、どの室内塵からも共通のダニには、チリダニ類が特に数も多く目立つわけですが、ツメダニ類の口器と比較してみますと、ツメダニ類は、ツツガムシやイエダニ類と同様に挿入す

表2-1

1981

月	検査ゴミ (g _r)	コナダニ	チリダニ	ツメダニ	ササラダニ	前気門 S P	中気門 S P	ヒゼンダニ	ノミ	南京虫	合計
8	1.1	9	348	95	52	6	2	0	1	0	513
	匹/戸/g _r	8.2	316	86	47	6	2	0	1	0	465
	%	1.8	68.0	18.6	10.2	1.2	0.4	0	0.2	0	100
9	4.4	10	1,543	399	53	7	9	0	0	2	1,933
	匹/戸/g _r	2.3	351	90.7	12	1.6	2.0	0	0	0.5	439
	%	0.5	79.8	20.6	2.7	0.4	0.5	0	0	0.1	100
10	0.7	1	19	0	20	0	1	1	0	0	42
	匹/戸/g _r	1.4	27.1	0	28.6	0	1.4	1.4	0	0	60
	%	2.4	45.2	0	47.6	0	2.4	2.4	0	0	100

表2-2

1981

月	検査数	チリダニ	コナダニ	ツメダニ	ササラダニ	前気門 S P	中気門 S P	ヒゼンダニ	ノミ	南京虫
8	10	9	2	7	8	3	1	0	1	0
9	40	40	3	36	13	3	2	0	0	2
10	4	2	1	0	0	1	1	1	0	0
合計	54	51	6	43	21	7	4	1	1	2
組成	%	94.4	11.1	80.8	38.9	13.0	7.4	1.9	1.9	3.7

る針が存在するのですが、チリダニ類やササラダニ類にはそういうようなものはなく、ただ咀嚼しやくする型になっています。そう、家畜舎等でみられるサンバエ類とイエバエやニクバエ類との違い……蚊とコスリカとの違いと同様な事がいえます。しかしながら、口器がそのような刺口になっていないから害を与えないのでしょうか。そうとはいえないようです。一九七〇年代に入り、チリダニ類は、慢性気管支喘息や、アトピー性皮膚炎などのアレルギー性疾患の抗原（アレルゲン）として働いていることが内外の研究者によって明らかにされてきております。又、つい最近（本年初め頃より）に至っては、川崎病（MCLS）との関連で、このチリダニ類が大きな役割を果たしているのではないかと非常に関心が払われてきています。このチリダニ類のやっかいな一面は、どの家庭にもそして全世界に存在します。一つの家庭で詳細にみてみました例を上げてみましょう。このおうちには、4LDKの鉄筋住宅で、洋間（カーペット敷）二部屋、和室（タタミの間）二部屋で玄関、ろうかはカーペット張り、ダイニングの半分をカーベ

ット張りをしてあるお宅です。いずれもカーペットは、コンクリートじか張りのところであります。このお宅をモデルに各部屋毎にゴミをそうじきで採取するとともに、ソファセットや、押入れ、カーテン、布団（敷）、上ブトン、毛布、整理タンス等々からゴミをあつめてダニ類の分布をみてみました。結論から云ってすべての場所から、すべての日常使っている家具、衣類からもダニが発見されました。もちろんチリダニ類が主流でありました。比較的多く見つかった所は、カーペット表面（台所）を筆頭にソファセットの長椅子、一客イス、又、洋間二部屋でありいずれも繊維に関わるものに多く、和室がそれにつづいていたので、物品それぞれの面積や大きさは違いますが単純には比較できないのですが、カーテンや食器棚の中にさえも分布していました。さらにおどろくべき事は、一年中使っている布団類にも非常にたくさんチリダニ類が発見された事です。フutonは約十二年使用されていましたが、その20gの中わたを検査してみた数字から、このフuton一枚に含むダニ数は六十万匹にも及んでいることで

す。この事から、いかに毎日の
そうじが大切であるか身にしみ
るのであります。
以上、「かゆみ」に関連する
昆虫類や、ダニ類を登上させま
したが、まだまだ書き落として
いる物も多くあると思われま
す、このあたりで稿を終らせて
頂きます。

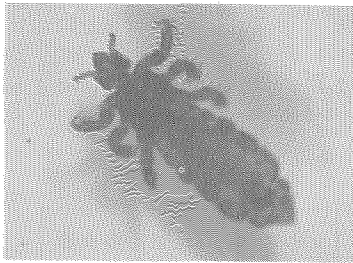
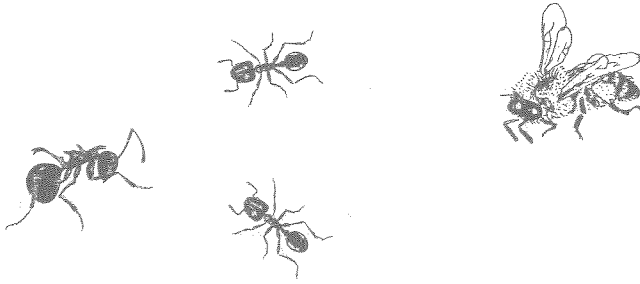


写真 3
アタマジラミ(小学生より)

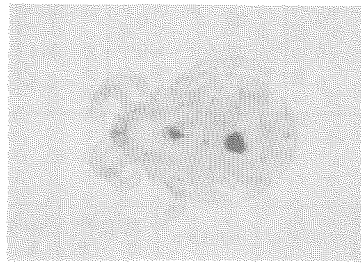


写真 2
ツツガムシ類

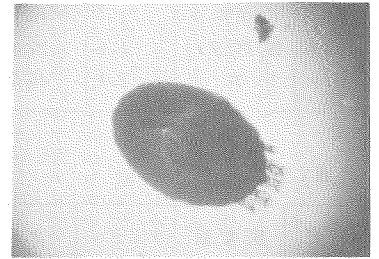


写真 1
イエダニ

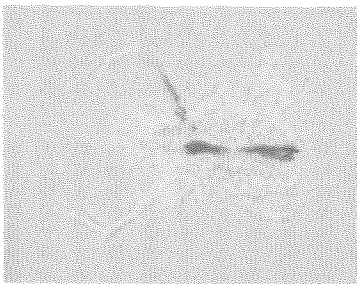


写真 6
アシナガツメダニの若虫

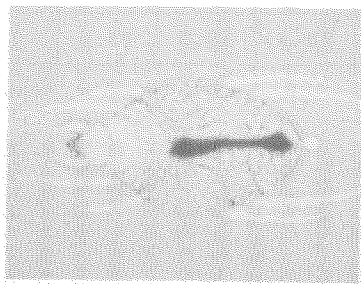


写真 5
ホソツメダニの若虫

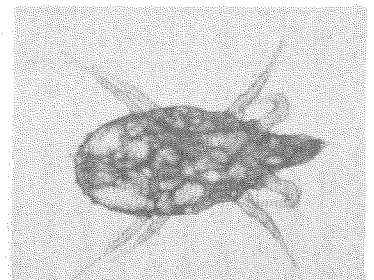


写真 4
ケナガコナダニ



写真 9
ヒメスギガミキリムシ

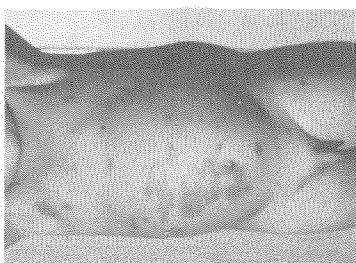


写真 8
ツメダニ(写真7)による被害例

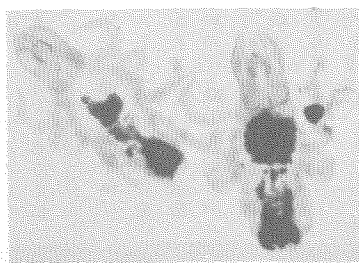


写真 7
ツメダニ類(ケラカロプティス)

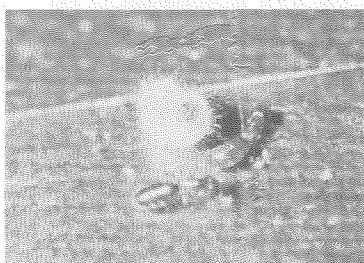


写真 12
シバンムシアリガタバチ
とシバンムシ幼虫



写真 11
タバコシバンムシ成虫



写真 10
クロアリガタバチ

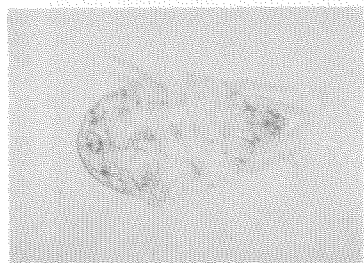


写真 15
チリダニ類(ヤケチリダニ若虫)

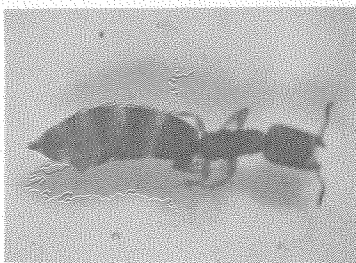


写真 14
シバンムシアリガタバチ ♀



写真 13
シバンムシアリガタバチ ♂